

作品名 休み時間

文字数 2467

筆名 くろいわ ゆうり

あらすじ ある日の休み時間。そのとき僕は机に突っ伏して眠っていた。ただ安眠を食うことができません、様々なクラスメートに話かけられることになった。その何気ない出来事と顛末とは…。

夏休み明けから教室の遮光カーテンが新品にかわった。それまでの汚れや埃をまとったお古のやつは幅が足りず一番後ろの席は直射日光が不可避だった。しかし、幅がぼつちりで厚みも充分で完璧な遮光が成されているはずの今だって、なんだかそこだけ眩しかった。それは太陽のせいじゃなかった。そこに座るワタナベさん自身が輝いていた。

そのとき僕は机に突っ伏していた。シンプルに眠たかった。すると僕は肩を揺すられて目が覚めた。その粗雑な揺すり方からワタナベさんではないことは明白だった。

「おい、宿題みせてくれよ」

案の定それはムラカミだった。

「え」

僕は寝ぼけ眼をこすりながらムラカミを見た。ムラカミではなくワタナベさんではないかという淡い、淡すぎる期待があった。どう見たってムラカミだった。

「別に良いぜ」

僕は机の引きだしを漁り数字のノートをムラカミに渡した。

「今日はやけに素直だな」

それから僕は再び眠りの態勢に入ろうとした。というか、ほぼ入っていた。すると、

「トヨダ君、消しゴム貸してくれない?」

とワタナベさんが急に声をかけてきた。僕はすぐさまワタナベさんに対して反応することができなかった。これはもう僕の元来の引っ込み思案な性格が所以するのしか、僕自身も言いようがなかった。

「ねえ! トヨダ君、起きてるよね?」

すると、ワタナベさんが僕の顔を覗き込むようにして見てきた。僕は焦って机に顔をうずめた。それから三分後、僕はなんとか上体を起こした。それから、ワタナベさんの方を見た。その顔をまともに見ることができず、その右胸あたりを凝視しつつ、

「もちろん、起きています」

と答えた。

「もちろん起きてたんだ！」

ワタナベさんは笑った。良い感じだと思った。いや、「悪い感じではなさそう」だった。期待し過ぎは良くなかった。とりあえず僕は勇気を振り絞ってワタナベさんの顔を見た。このままでは変態野郎だった。

僕はワタナベさんの顔をこんなに近くで見たのは初めてだった。やはり可愛かった。とても可愛かった。凄く可愛かった。何でも良いが、とにかく可愛かった。

「ところで何か用でしょうか？」

「消しゴム貸してくれない？」

「なんだ、消しゴムぐらいお安いご用です」

僕は昨日買ったばかりの消しゴムをワタナベさんに手渡した。そして、

「昨日買ったばかりです」

とおもわず言うと、ワタナベさんは「そうなんだ」と平坦なトーンで言った。これは失敗だった。どう考えてもそうだった。そして渡すときに彼女の指に触れてしまった。これは不味かった。ただ、嬉しいことでもあった。

「ありがとう」

それからワタナベさんはルーズリーフの上で消しゴムを擦った。

「今日、消しゴム忘れちゃって」

ワタナベさんは照れくさそうに笑った。まだ消しゴムで消し続けていた。どれだけ間違えたのだろうか。まだまだ消しゴムで消し続けた。何かストレスでも抱えているのだろうか。こんな可愛い子でも、悩みはあるのだろうか。いや、あるだろう。あるに決まっている。しかし僕にその悩みを解決できるだろうか。僕の脳を絞れば、解決の糸口になるような事ぐらいは言えるだろうか。そもそも、そんな機会が訪れるだろうか。いや、訪れるわけがなかった。なんせ、これで、二人の物語は終わりだった。

ワタナベさんがこれ以後、僕に消しゴムを借りにくることはなく、卒業までワタナベさんと僕は会話を交わすことさえなかった。

ではなぜ、消しゴムを僕なんかに借りたのか？

このときワタナベさんは、僕の左斜め後ろの席だった。なので、消しゴムを必要とする緊急の事態に陥り、ちょうど机に消しゴムを出しっぱなしにしていた僕に気付き思わず声をかけた、という線が濃厚だった。

しかし、ワタナベさんの右隣にはほぼ「他人」の僕とは違い、たびたび彼女と親しげに会話を交わっていたカンダガワという男子がいた。

何か頼みごとをするならば、カンダガワにするのが妥当だった。それにカンダガワは生粋の「消しゴム好き」として教室内で鳴らしていた。「良く消える消しゴム」、「普通の消しゴム」、「あまり消えない消しゴム」、「まったく消えない消しゴム」等々、バラエティ豊かな消しゴムを所持していた。

すると、謎解きもほどほどにして、ムラカミが僕のところに戻ってきた。

「サンキュー。今日、絶対当てられるから」

というのも、数学の教師ハラダは授業中に問題の解答をたびたび生徒達に答えさせるのだが、決まってその日の日付の出席番号の生徒を当てるのだった。つまりこのときの日付がムラカミの出席番号だった。そして案の定、解答を求められたムラカミは見事に間違ってハラダに怒られた。僕を買いかぶり過ぎだった。ぶっちゃけクラス内の成績はいつもトップクラスだったが数学は苦手だった。そして僕は出席番号的に当てられる可能性は非常に低く、テキトウに宿題をしていた。この時点でハラダに怒られるムラカミの姿がイメージできて、僕はおもわずほくそ笑んだ。するとその光景を見ていたらしいタハラさんが僕に、

「え、一人で何笑ってんの、キモイよ」

と言ってきた。

「え、別に笑ってねえよ」

僕が抗議すると、いやキモいからとタハラさんは言葉を続けた。

「まあ、そんなことどうでも良いよ」

「何か用？」

「いや、トヨダに教えてもらったシャムキャッツめっちゃ良かったよ」

「ああ。もう解散してしまったけど、本当素晴らしいバンドだ。たいこが特に良

い」

「たいこ？」

「いや、ドラム」

「じゃあ、ドラムって言えば。なんか人と違うセンスの良い奴だと思われない感じでまくりだけど…ダサイよ」

「そんなんじゃないし」

と僕が言うと、タハラさんは「またお気に入り教えてよ。教えてもらったものは全部聞くから」と言った。僕は「分かった」と言った。休み時間はもうあとわずかだったが、なんとかひと眠りしようとして僕は再びうつ伏せになろうとしたが、ふいに視線がタハラさんの方に向いた。タハラさんもこちらを見ていて僕と視線がぶつかった。タハラさんはなんとなく照れくさそうに笑みを浮かべて自分の席に戻った。すぐに次の授業のチャイムが鳴った。(了)